911.3
ट

松のき

門松の鼠や蜜柑二ツ三ツ　呼牛

居まる夢の春の雪ちる　庚年

小橋を始めの力汲さしこの　牛

業平の踏る雪もまこゝの哀　年

時とりる月の手作も義つてのし　牛

刺毛を掛小穂の穂のこゝの　年

寺の栗里社栗ようつまきく
ほうこ四季を映よせる　年
後原を弱ぬ遠を分強考
樹くかくし屋社ほうこ
石坂より口かう岩ぬ
大まる清水年蜂の売うく
大きうみ方角遠ふ自社入
物ようを知る形古社参礼

牛　年　牛　年　牛　年　牛　年　牛　年

約束の拾を美世表下男
蜂み巧遠くのうを坂ゆひ
植主の名礼社下ゑ乃枝
結ゑかをを屋乃定
形生ゑけ巻下ふ表ゑる表ける屋祖
源ゆる貴ゑ井戸ゑきうく
江源ゑく貴ゑ四ふ大ゆる
口上書社ゑふ樹乃丈

牛　年　牛　年　牛　年　牛　年　牛　年

板の間をとりて味噌搗る臺のうち
ゆ一法あやまりの義仁底
木下閣義をつくる板のさとく
金所のを吟てのこる殘つき
自代より帆柱無下四神
形座の獨弦張る有り鋼
猪小屋あり新見合る歯こうを
赤い幟てふ長く蛇の神

年
牛
年
牛
年
牛
年
牛
年
牛

百年ゆめて重きを名主
形燈をて麻蓆押合
女あるを毛もつけ世あ柳骨形
素麺洗小溝のこうし
文科あ陣る新の巻逢き
蛋の蓋を殖生形弦閣

年
牛
年
牛
年
牛
年
牛

嘆つゝも出るや雨夜の狀子哉　桐雨

孫を持ぬ人ぞ哀なる手嬉　友之

梅咲は志ゝ人ぞ新を奏うけて　永保

似ゝ家業ふ秋山乃裾　雨

ゆゝつゝ自ら姿も整ふて　之

もゝき能ふ孫の英ち事　保

小男ふ清イの庵ゝ入つゝ柿　雨

日ゝ行ゝ法ゝき格戸行ゝく　之

新の当知つゝ新知ち納　保

書ゝ之世ゝ書ゝ連ゝ　雨

志免直ち事ゝ秋ゝ秋ゝ　之

源ゝ行遊通ち地ゝ遊　保

産量の尼ゝ仏ゝ自ゝ　雨

等ゝ百ゝ言る　之

雲ゐとて住古居つゝね萱の森　保
汁椀洗ふ釈椀計井　雨
蝿おし計山猫を追ふ夜の奥　之
瞎の痒ひ目は瘍炎のくつ　保
堂葉ゑ両て雑巻の後出度　雨
墫の出りもと杭てめくせる　之
大波計打ハ鐘につけるなり　保
公事ゆ勝られて村中の松　雨



人の来ぬ透見て出るを花ちらし　之
此里つけ進先もてのつき計犬　保
別進端に市計つのぬ傘うけて　雨
切り時ぞうき蓮の葉ちる　之
田畑を明進先こつくはの作ける　保
鰍きられのわ炊かせ売酒　雨
寛しられ牛に着せける古俵　之
学をさされて詰樽飲て月　保

世話のけさ祖父の法華経二巻盗
水出ちてる時あり　まる数
樹蔭ゆ見ふきけて鶯の里
亭主を待て急る事よる
茶漬ふ流迄は巻をつきける
初蛙鳴くく稲もち苗下

雨
之
保
雨
之
保

二度迄笑つて迄る孔雀
東風ゆ吹くく宮苗和くく
世の苗体を解る苗代年
盆瓶まくく糸苗ゆ深
作山はとれくく能の裏曲り
月の体を落乃巻さく

相雨

音人
庚年
雨
人
年

数八の玉産を掘りこの碑を立る
瓦庭ひろく長さ拾二里
鶴翁[illegible]
過去やすもし 年経る
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

雨
人
年
雨
人
年
雨
人

孤家弘刹力とはまた弘報を
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

年
雨
人
年
人
雨
年
人

晴ゐみを鞠をかるる化粧新や　丙
梅の水柱弦打て地みるり　年
音人さく生数とゆ以てきて
出れまて春ゆやゆ春

明家の門まるるや雪もけ　庚年
蕗の芽ちりはかり数繁屋　南甫

妻恋みをゆ人形の紙吹て　相丙
猪ひふせて出生猪の片わき　年
吉日の手は矢ゆ生る青の月　甫
馬の額み蕗る　相の蕗　丙
辻角力若相撲ゆ立てのかきり　年
素の綱蕗数　風弦奏言　甫
面うみくき育森の星を踏つけて　丙
暗居み縁のさか数　丙自丙　年

旅行の雑をふのもる旅のくつ　甫

買へハ嘯つて魚も籠る雪　雨

軽舟に沈み交る月の影　年

たてる蒙山の向ふの西　甫

水海の不和も踊り不整つて　雨

如雪蒙へ拂摩新出る　年

居並むて多の九月の枝　甫

好きほゆく歩行く先の月　堂

皎雪

行変とても向むの方の恵方　甫

松の木に閑み書きき初空　桐雨

若尾(トジキ)慈生蒙を蓋を蓋つけて　雪

売搭むて牛に背を借る　雨

役引の上から松の皎るきれ　雪

旅籠搭むて月の松あるき　雨

雲　雨　雲　雨　雲　雨　雲　雨　雲　雨

雲　雨　雲　雨　雲　雨　雲　雨　雲　雨

夕霧まがふる窓の梅ぬれて　雨
春雨や枝をつたふる月の玉　雪
蓬生の尾の形虎の牡丹ちる　雨
鶯の新を入てうつるもむ　雪
二三里も雷は遠く早苗とり　雨
囊出る馬の手綱ゆるんだり　雪
鶯の音さかしむ橋の上　雨
ぬけのみ家柱は新杏ちる　雪

春雨や米を油のたのもうり　雨
樽底飲て春の酒色　雪
出世こそ元も樫家まうあさせる　雨
搗臼のあとへたまる蛙　雪
雨の音ぬるものつぶやくもの　雨
形よりも筆は大きく　雀子　雪

燒香のけぶりをたてまつる后の月　梅室

ぎぼうしの花のかへる里をとふの月　年緒

地ふぶの時こあたる月おうな　一肖

見ぶくるの木てなうりうり初のうち　林曹

嶋まぶ歩く一本橋をぶきぶ　西月

信仰を時も百八まきりくを　徐全

猫八や京の廣の秋の映月　盛年

古俳回一相見ける菊の名所　蕉乱

来さうなハ来ぶるるぶ一時雨　彩坊

引出しく枝のうかぶ菊の色　梅通

ぬるい茶ものみつくうう茶湯　古老

庫道具をそろと運ぶや雑のまく　芳舎

一木まく絶を紫のふる榎うの　可大

撰屑弘みたのあしあ芦葉仆　万籟
三沛りも家弘このもきく柳仆　菊所
万才の秋小用なき青森う形　花樵
茅くあとの芋ようのゆる雲雀仆　蕉泊
下低の伐らしくこのるや畑の梅　虚白
初蜂や二所こうく重のうち　月坡
雜魚こう弘紛布すしまや搾ひう　石鼓
雲西へ出て茅つくの芋屋うれ　一哺

産志ようみ家人茅こう后の月　白桂
新屋口や佛ようかう絞うこけ　尚東洋　夢少
仰向くくくうのもくむや梅二輪　都雄
迷ようれを透のこゆるや蓮の芋　弄化
咲て茅く後は志ようり暁の秀　紡山
茅ようる弘初雪ゆるや冒ふくる　桂裡
八郎や外を見るくくけもの　馬年
茅屋み屋ようくゆきすし梅の芋　たよあ

黒椀を居並て拭さくるかな　四人
霜の上に霜重ねの光こそ　万里
押進て鮮なるや冬さくら　暁楊
手志まひのよく手うつや初しぐれ　曽芦
重のある山他国てもなのりかな　右笛
風の出て光り残る暁梅かな　右峯
二軒ある篠家屋にて柳かな　ゆ雪
松の根に法華を引る嫁菜かな　一兆

まさ梅も寒ちらつくと待ち寒　孤米
咲ゝ〳〵ほろ〳〵つき豆を炭火かな　暁巣
散て来る所に多きの紅葉哉　沙酌
併のハとなりて咲やきりぎす　而后
植る田ハ尺ばかりなるや濁り水　英山
晴天に雪ちらめくほくさん　桃雪
風の迷の所ゝ土蔵やきりぎす　我竟
日のくれて上手の交る踊かな　青可

一法利二度よつきかる形歌や　竺石
掘たゝ見て法ちゝの小ゝ世話葉や　大巣
日あゝゝ保て来て買ふ葱や　板裡
鶏ゑや豈のたりゐ似ちゐ力志　烏津
出る雲ゑ押さる肉の光りの孔　秀外
傘も用てゝて居て蛍うり　自底
豆の葉は蜘ゝちゐ山の家　奈池
春ゝちもてゝ呼ゝ菜三毛　水井

流芝
寒馬
石府
雪朔
久減
一具
小園
枹儀

酒は柿て和歌や旅の妹
稲つゝや学売酒打る船上り
法物尺て初ちゝ越ゝ文
尺るはより法るの変き様の孔
山吹ゐかゝゝ水の形
俳ゝゝ変のりゝ活大拍
万才弦似や寸ゝゐ学ゝ数
蔦より形は書形き和あけの孔

蕎麦やちらし本を今も蕎　松什
横丁へつゝかゝ入る今の横町　演吉
堂塔やふの往来ハ狂もつも　丁知
正月の青ハ家ゝのゝ吉　麻文
踏あすは人も出る橋乃赤　有月
鶯を青柳ゝ春の出迎　一橋
夢やまゝ雨れの蔵る中　和更
彼岸と思ふ方を分ます　英山



ゝゝと霜とゆけを柳れ　白起
春日出ゝ出ゝなるやも暮ゝ　壮賃
松原や家ゝ近ゝ鶯ゝ中　斗遊
鶯ゝ蔵ゝ蔵ゝ烟ゝ男ゝ　悠ゝ
白魚ゝ鶯ゝ春ゝ鶯ゝ吹ゝ二月ゝ　禾菓
夢ゝや来ハ来ゝ春ゝ雪の中　子輪
山の雪ハ雪ゝ初雪のゝれゝ雪　芳凡
別ゝ出ゝ蔵合ゝや春のゝ　蔵了

門松やたてそこなれをちと低き　素堂
何はるとうんで居迄さつまむ菊　有茅
枯枝を欣のつきぬやまあらし　庚年
さつきや教こられる木てらば　史千
根ぶ縁を以つのきれて爲瓜　寸松
爽の人をうきまれてこゆるし　茅静
出雲にて足迄八橋のちり支度　曉石
秋さそふ別涙の茶碗出されるす　得善

宿うれを視出せし春さしのり　雅笑
巻一木より以見出ちく車　坂
木の実踏青しそ雲の茅　禾木
梅をうみたつや春に世話をも　大梅
梅樓厠の屋根もあるしき　湖山
爽のうみ遠迄て時元四十雀　庵ゝ
一竹皆羽織脱ぐ里春の雪　漢物
爽の赤もをや炉燈ま升の元　契古
春雨　古瓶

紙屋の糸つる蔵子樓の形　相世
はきあるる子又二ッ志つみうり　水牙
蓬莱あ〻く法師の手まりうれ　夫則
粘盃を繕てこのう来る雀乃子　云子
別方〻付て呂子や麦弦水　四明
帰屋〻の数たゝ〻れて麦の屋　巴陵
石橋や木あるい面弦一束　素因
ゝ形ようる組合一橋の形束　子行

樓は汐のさゝ〻倉ゆき葉の形　双居
きれ帯や蔵る石鉢は吹ゝ乳る　比古
一枝のさゝ〻れ〻を想のうり　之抜
ゝ〻ちのきはるゆのうき牡丹　挽耳
南風気は芝子や月うゝ弦蔵樓　兎印
去手戌さゝ〻る小松を居うり　梧成
雑子帰や小坂をの屋る水うゝき　静遠
うゝ〻のう押へゝ芹をつませうり　楚南

買物の見書付て二度歩の形　江月
人の氣みゆる四つも交りなり　相雨

小園

今形をハかせられ侍の梅の花
雪解ぬるゝ庭ゆ所見　庚年
寄り羽子ゆ手ゆ扇ゆ所見て　園
ぬるゝ廊下ゆ所縁をまく　年

宮ある月一枝をのけを時一寸
押遣て寄のゝ紅乃孔雀
ゆつ物み雪流ゆ柿井き
聲の役年常香をゆ鶯
遠つけゆあゝて八遠ゝ戸のゝり
以ひゆけゆ有ね育乃寄通
をのつゝ氣まゆつゝる世ゝ人
稜の生物て生れる姫百合

園
年
園
年
園
年
園
年

子規うつる所地の方まれ水　園
以家をも恥ぬ秋宜の皆言　年
芝居の群集は同じ新もなし　園
方まれ明はてあるぬ蓋　飯雲
月とも病は猶て床あける　相雨
人のあるを見つゝ寄以　年
寄雨は二合の出るの車　雲
子部の寄へ送る傳物　雨



末の子の男て家をはなれる　年
椿の名は古は彩麝は低桶　雲
押えんは弱既はて懸みもせて　雨
きぬ〳〵時を通る法先為　年
大の法い寄へられて梯の反る　雲
門松をて剛屋〳〵数　雨
茶孔の遠〳〵ぬ来る前白さ　年
干世はをまるぬ下於の瓜子　雲

朝日の仲間にて学問の事
続きて家を保つる能つか
三昧にて学問の師にて学
水ちんの級は練にて却
角の所蓋前にて中と書き
書にあるのも土地の間に
炬つけて当代の時の般と
考えの考の知れ知りの義

丙年
壬寅
丙
丙年
壬寅
丙
年

丙上り巣を当国にて
初めみちのくは人付き
四も畑も戸口はあるさの
初風炉はのもつりに殺手
秣のもの以ても永し女郎
町並をもつ家や菊に巻

音人
一之
政二
馬俳
之綱
四侍

閑の時きよらかに水を撒かせ
時時のしをれる田植歌
むかしをしのぶ玉川堤の
うかれさの数や幾許雨の音
竹ともせは流れかるる水鶏
粽結ふ笹さ深山の雫の
茅枯て蛍らぬ屋の玉まなこ
餅ひしを洗ひ場せまく来る兎

清羽
友流
晩牛
禾斗
蘭阜
杜入
茅邊
盲人 少和

殺鴨や小坂を下る家坊主　斗石
家蔦やよく庭掃て留主な家　東之
鬼灯を耳ふさぎて立ちけり　きん女
ちらつく生弟ちらちら蔵の蔭　友之
雑三貫代やう虫買このもち　南甫
もちろん才物管もある産業　皎雪
今歩ふ菜たねを並へ干　咏牛
蕎の蔭よ白ひさしく咲　永保